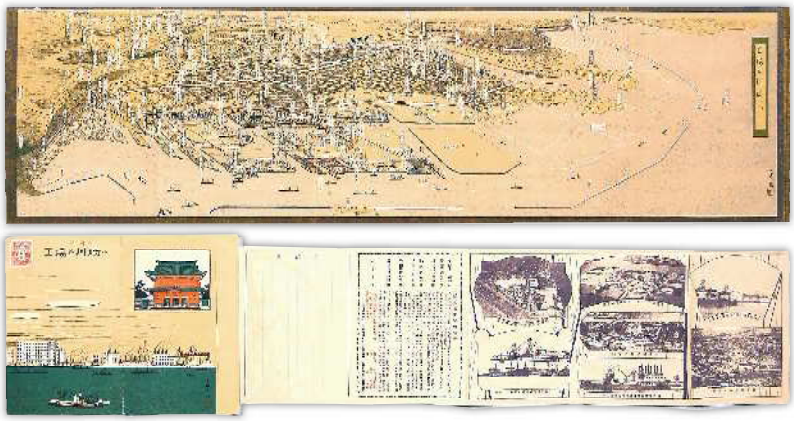
1 工都川崎へ

（明治・大正・昭和初期）

町をあげての工場誘致

（川崎市の前身である）川崎町は、明治時代末期から地域活性化のために町をあげて工場誘致を進め、多摩川の水運と鉄道という輸送の便利さもあり、多摩川沿いに多くの工場が建設されました。さらに、1913（大正2）年に始まった臨海部の埋立は年々その範囲を広げ、埋立地に多くの工場が建設され1935（昭和10）年頃からは、南武鉄道（現 JR南武線）沿線へと広がりました。

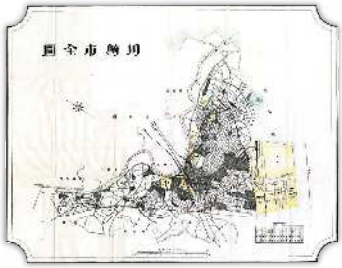
川崎は、生産地（川崎）から消費地（東京、横浜等）が近く水陸交通の便がよいこと、土地が安いこと、電力が安く地下水が潤沢であることなどから、工場適地として注目されました。



書簡図会「工場は川崎へ」（1934年）　川崎市市民ミュージアム

川崎市誕生

工場誘致の結果、川崎には大手企業が続々と進出し、職を求めて人が集まり急速に人口が増加したことで、水道や道路等のインフラ整備が早急に必要となり、1921（大正10）年、川崎町に水道が整備されました。ちょうどこの時期に関東大震災後の復興計画が重なったこともあり、川崎町に隣接する町村合併の機運が高まりました。こうして、1924（大正13）年7月1日、川崎町、大師町、御幸村が合併し、川崎市が誕生しました。その後も近隣の町村編入によって市域がしだいに広がり、1939（昭和14）年の柿生村と岡上村編入により現在の市域が形成され、人口26万人の都市となりました。



川崎市全図「川崎市勢要覧」（1933年）

工場のばい煙、排水問題の広がり

工業都市として発展を遂げた川崎市では、昼夜なく工場から排出されるばい煙による大気汚染や、排水による川や海の水質悪化が深刻な問題となりました。降り注ぐばいじんと汚染された水は、市内の農業・漁業に被害を与え、工場と周辺住民とのトラブルも少なくありませんでした。この頃の公害は、加害工場と被害住民との個別補償によって解決するものとされていました。

扇島海水浴場と工場地帯（1930年代）　川崎市市民ミュージアム